

ら、そのような「権威」を認め、受容できる程度に言葉に対する規範意識の高い者ほど(自分の言葉はどうであれ)、そのような知識自体は持ち得る。井上(1998,p.30)でさえ「筆者はラ抜き言葉を使っていないつもりだった。」のが、「自分の講義のテープをあとで見たら、なんと自分でも使っていた。」と言う。当該イントネーションをめぐる評価と使用意識の乖離が生じた背景には以上のような事情があったのではないかと推測できる。

以上、筆者の内省と観察をもとに、当該イントネーションの実際の使用意識を探り、この意識が、当該イントネーションをめぐる評価と大きく乖離していることを指摘した。そして当該イントネーション使用が拡大していった背景に、当該イントネーションの使用される場面の増加があり、年代による当該イントネーションの習得過程の違いによって、実際の使用意識とそれらに対する評価が乖離したのではないかと推測した。これは当該イントネーション使用者としての筆者の内省と、当該イントネーションをとりまく状況からの非常に雑駁な推測にすぎない。多くの被験者を対象にした当該イントネーションの使用意識や当該イントネーションを伴う発話に対する印象について実証的な調査結果の検証は2-4で改めて詳述する。これらをもとに、2-4で再び評価や印象から当該イントネーションに関するステレオタイプについて考察していく。しかしその前に2-2、2-3で実際の当該イントネーションの音響的特徴や談話・文法上の機能について明らかにしておかなければならないだろう。

## 2-2. いわゆる「尻上がり」イントネーションの音響的特徴

これまで当該イントネーションの名称、出自、評価及び使用意識をめぐる問題点について概説してきた。しかし、先に述べたように当該イントネーションの社会言語学的研究は井上(1994、1997)や原(1992、1993a、b、1994a、b)で、ごく僅かに行なわれているだけである。これらの社会言語学的考察や談話・文法上の機能について考える前に、詳細な音響音声的特徴を明らかにする必要がある。川上(1993)が指摘するように、先行語のアクセント型の違いによる「単なる生理的事情」から、当該イントネーションの音調パターンが微妙に異なることもあるからだ。そこで、佐々木(2000b)をもとに、実際の談話ではなくインフォーマントの読み上げる音声を利用して、いわゆる「尻上がり」イントネーションの音調面のうち、先行語のアクセント型別の特徴を明らかにする。その際、他の句末イントネーションとの比較も試み、当該拍の長さ、ピッチの動向、当該拍内のピッチの変化率の面でどのような特徴があるか、詳細に見ていく。

ピッチの動向については、従来のような音声分析ソフトによる実測値をそのままプロットするタイプのピッチパターンではなく、実測値をインフォーマントごとに標準化し、同一アクセン

ト型の複数語句から、それぞれの韻律型の「平均的なピッチパターン」を作成した。これは各インフォーマントの発話速度や声の高さなど、当該イントネーションの観察に直接必要のない個人差を抑えるためである。

当該イントネーションの音声的特徴、「上昇後下降があり、その拍が伸長する」という点については、これまでも言及され、ピッチパターンでも確認されている(上村 1989、杉藤 1983、井上 1994、原 1993a, b)。ただし川上(1993)は上昇を絶対的な条件とはしていないし、筆者の観察でも上昇がピッチパターンにはっきり現れないものもあることがわかった。先行語のアクセント型による上昇の現れ方の違いがあることが予想されるが、従来、先行語アクセント別にどのように実現されているかについての実証的な研究はない。また上昇の程度が疑問などの上昇イントネーションとどのくらい異なっているのか、など他のイントネーションとの音響上の異同についても詳しく見ていく必要があるだろう。

### 2-2-1. 調査の手順

以下の読み上げ語句一覧に示す通り、アクセントの異なる東京語の2拍名詞に、いわゆる「尻上がり」イントネーションを伴った助詞「に」を付けた短い句を対象とした。ただし、比較のためその他のイントネーションを伴った助詞「に」、「には」などが付いた句に関しても同時に調べた。3人の東京生まれ東京育ちのインフォーマント(40代北区生まれ男性、30代現西東京市生まれ女性、20代豊島区生まれ女性)にこれらの語句を読み上げてもらい、カセットテープに録音した音声を、東京外国語大学鮎沢孝子研究室備付けの音声分析ソフト「音声録聞見」で分析した。その際、特に句末2拍を重点的に観察した。なお、以下の音声分析ソフトは断りがない限り全てこの「音声録聞見」である。

対象語句はすべて音声分析ソフトを利用して第2拍以降の各拍の開始時と終末時のピッチ(基本周波数値。以下F0値)を調べるとともに、各拍(第1拍は除く)の長さ、拍内に「山」や「谷」がある場合には拍の開始からその頂点、底点(以下まとめてピークとする)までの長さとそのF0値を計測した。F0値はほとんど音声分析ソフトから得た値そのままだが、明らかにオクターブ異なっているものは修正し、雑音を拾ってしまったところは削除した。2拍語の各拍の長さは、後拍の始めに[m]、[n]、[dz]のどれかがくるため、後拍開始部分のパワーの弱まりとピッチの動きを目安に計測した。これらの作業も音声分析ソフトのサウンドスペクトログラムを見、音声を聞きながら行った。ピッチ、長さの計測は全て筆者一人で行なった。

\*\*\*\*\*

## \* &lt;読み上げ語句一覧&gt; \*

\* 平板アクセントの語 鼻、君、伊豆、嫁、ひも、 \*

\* 尾高アクセントの語 花、黄身、犬、夢、芋、 \*

\* 頭高アクセントの語 ハナ(人名)、キミ(人名)、絹、ユメ(人名)、デモ、 \*

\* その他の語 佐藤、砂糖、サトオ(人名) \*

\* それぞれに「に」を普通に付けたもの。(例：花に、鼻に、ハナに…)

\* それぞれにいわゆる「尻上がり」調に「にい」をつけたもの。 \*

\* それぞれに疑問のイントネーションで「に?」を付けたもの。 \*

\* それぞれに驚いたような調子で「に!」をつけたもの。 \*

\* それぞれにがっかりしたような調子で「にィ↓」をつけたもの。 \*

\* (但し、こちらの望む調子で発話したのは3人中1人だったため、データは  
1人分しかない。) \*

\* それぞれに確認するように「ね」を付けたもの。(例：花ね、鼻ね、ハナね…)

\* それぞれに「には」を普通に付けたもの。(例：花には、鼻には、ハナには…)

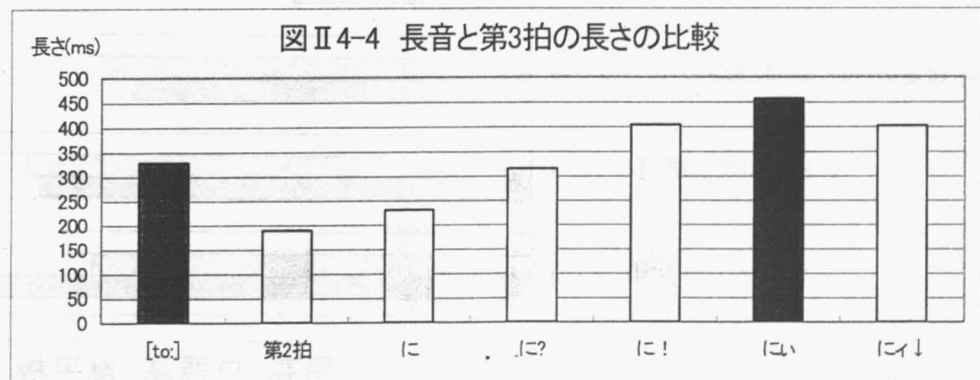
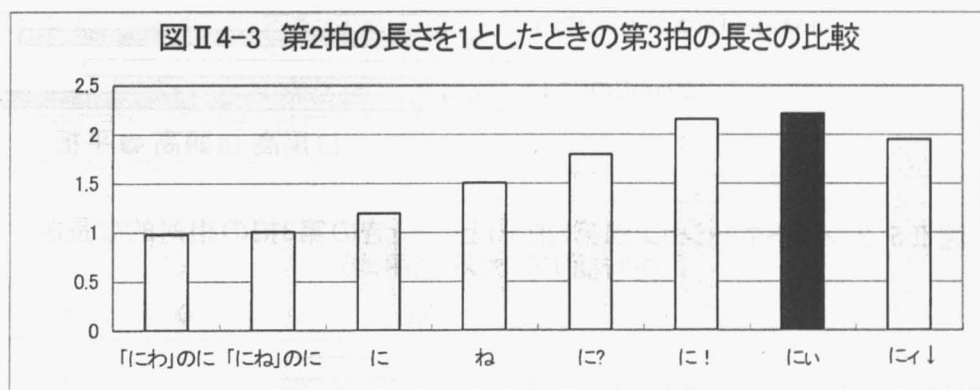
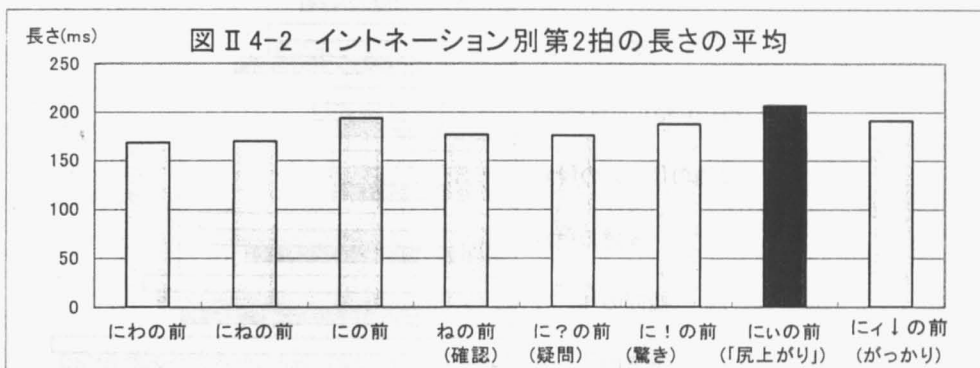
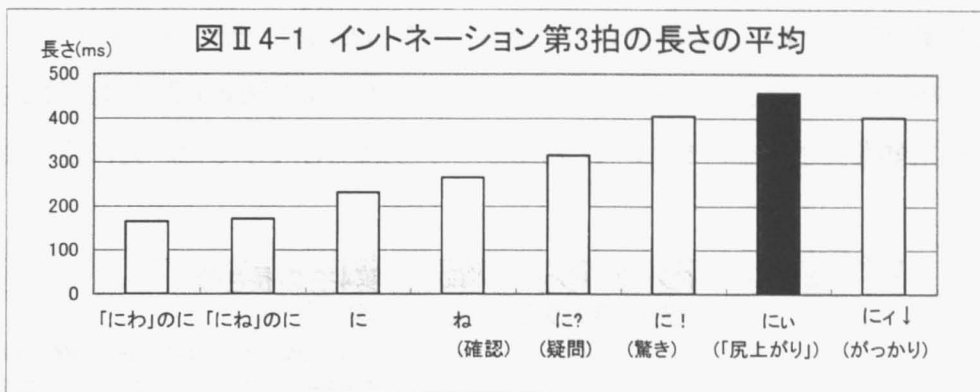
\* それぞれに「あのね、友達とね、学校にね・・・」のように「にね」を付けたもの。 \*

\*\*\*\*\*

## 2-2-2. いわゆる「尻上がり」イントネーションが加わった助詞の部分の長さ

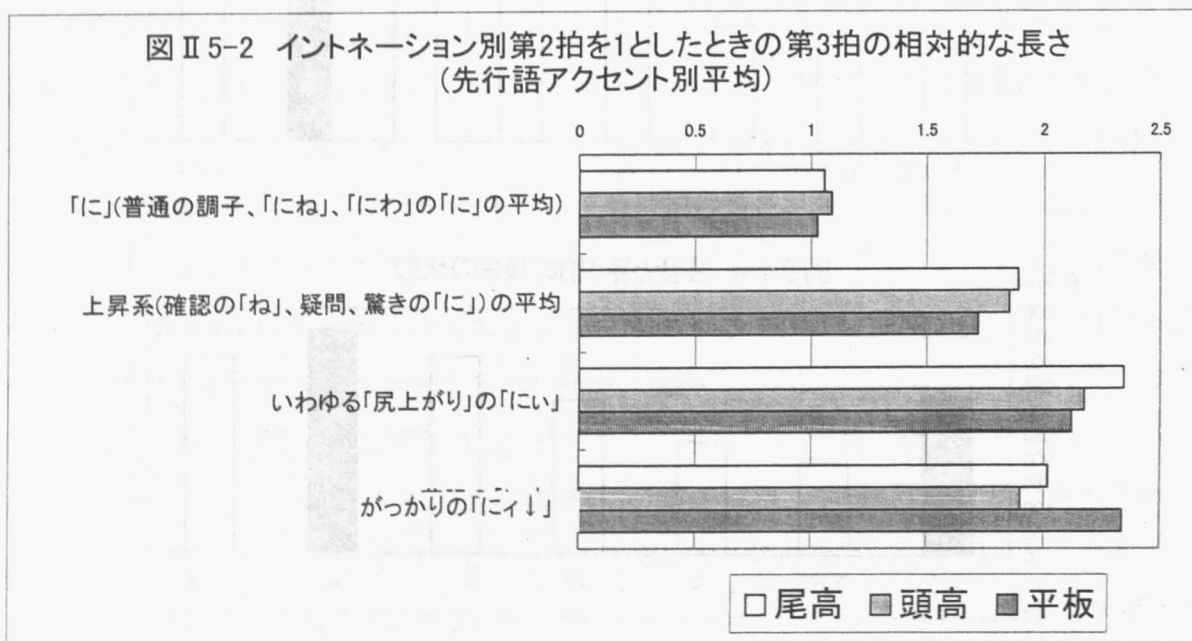
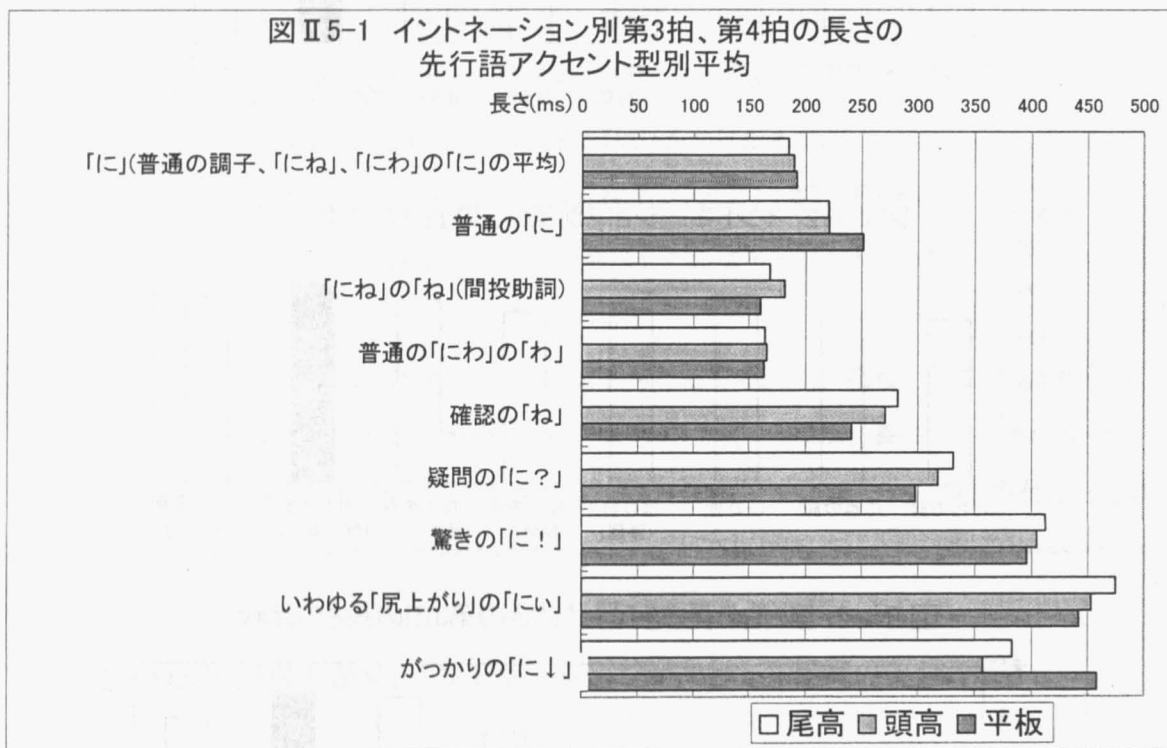
従来指摘されてきた通り、また、様々なエッセイなどで「それでエ」あるいは「それでー」などと書かれる点からもわかるように、当該イントネーションの特徴の一つは通常の句末拍より長くなるという点にある。図Ⅱ4-1に示すとおり、他のイントネーションと比べても、いわゆる「尻上がり」イントネーションが加わったものは、最終拍の長さをもっとも長くなっているのがわかる。一方、図Ⅱ4-2は先行語の第2拍の長さについて後続するイントネーション別に表したものだが、第3拍の助詞の長さほど大きな差は見られない。また、図Ⅱ4-3に第2拍の長さを1とした場合の第3拍の長さの割合を示したが、最終拍ではない「にね」、「には」の「に」は第2拍とほぼ同じ長さであるのに対し、いわゆる「尻上がり」の「にい」は、驚きの「に!」やがっかりしたような調子の「にィ↓」(第3章では「下降調」に分類)と同様、平均して第2拍の長さの約2倍になっていることが分かる。環境の違う拍同士の単純な比較は意味をなさない(ニックキャンベル1997、東1997)が、参考までに長音(同じインフォーマントによる「佐藤」、「砂糖」、人名の「サ

トオ」の[to:]の部分)の長さの平均との比較も図II 4-4に示した。イントネーションによっては長音より長くなるものもあることがわかる。



### 2-2-3. 先行語のアクセント型別後続助詞の長さ

図Ⅱ5-1 に示すとおり、いわゆる「尻上がり」の「にい」の場合は、他の上昇系イントネーションが加わる助詞(確認の「ね」、疑問の「に?」、驚きの「に!」)と同様、先行語のアクセント型が尾高、頭高、平板の順に、第3拍が長くなる傾向が見られる。また図Ⅱ5-2 では、第2拍に対する第3拍の相対的な長さについて、いくつかのタイプ別に分けて示した。先に述べた通り「尻

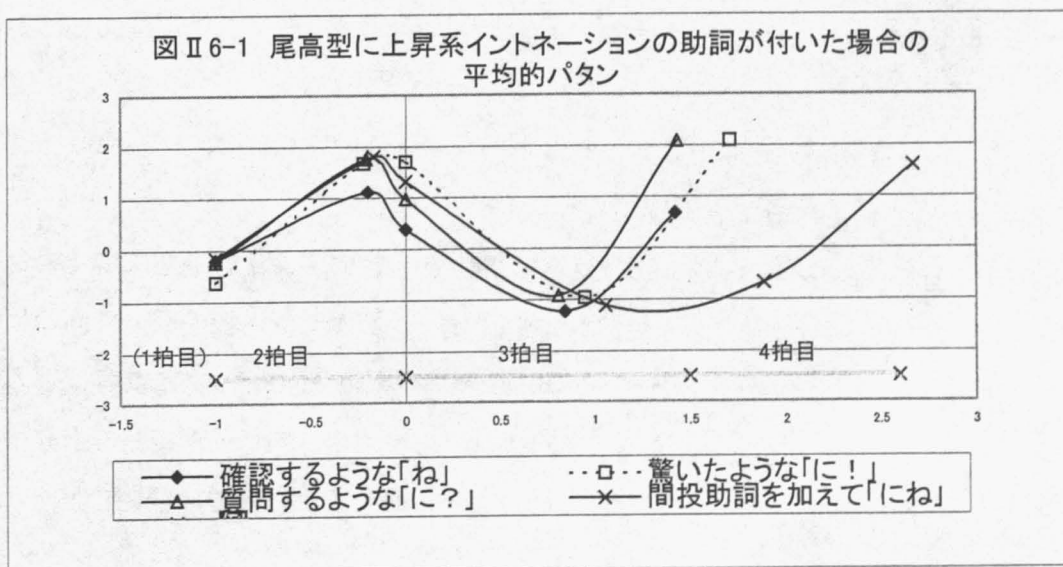


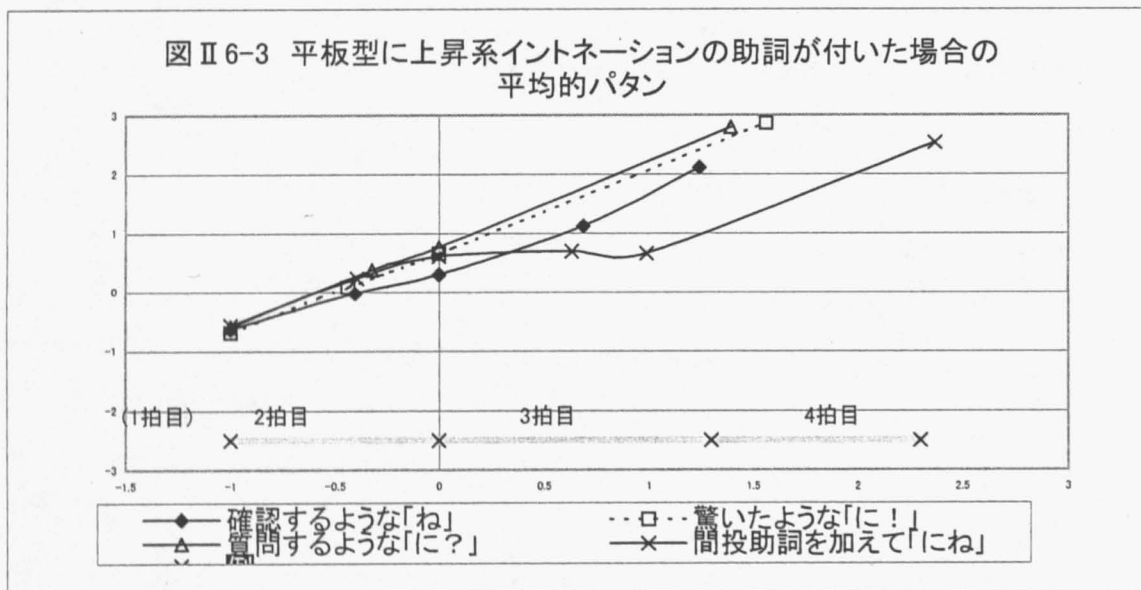
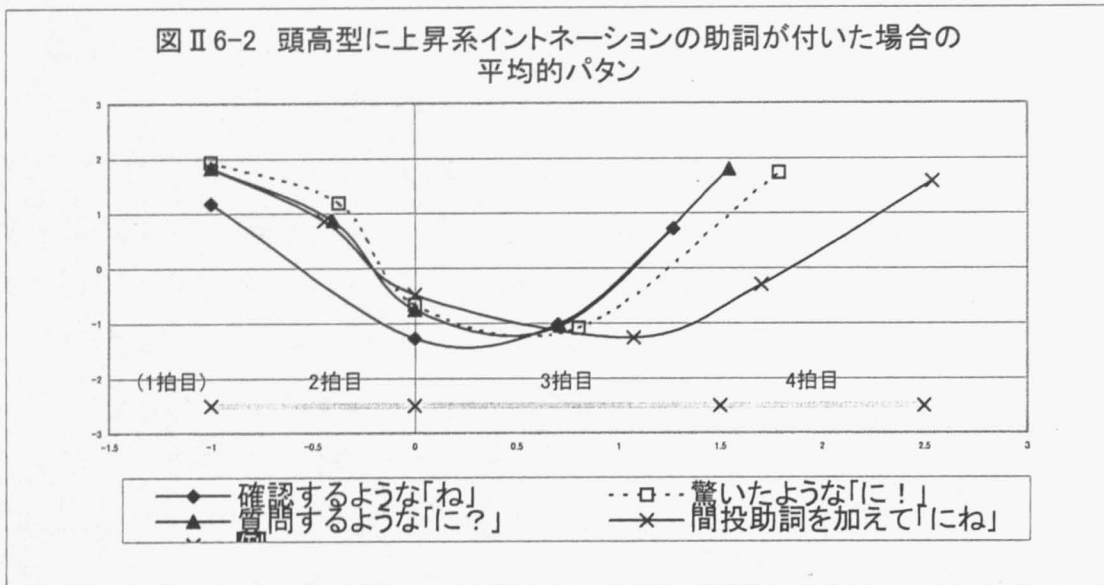
上がり」や「語尾上げ語尾伸ばし」という通称が示すように、このイントネーションの特徴として一度上昇してから下降が来るため、上昇系イントネーションと共通の特徴も見られる。

先行する語のアクセント型ごとに第3拍の助詞の長さが変わる主な原因は、人ごとにF0値の変動幅がほぼ決まっている(鮎沢他 1991、Ladd1996)のに対し、第3拍開始時のF0値がアクセントごとに異なることによるものと考えられる。尾高アクセントの語(以下尾高語)に上昇系イントネーションが加わる場合、「アクセントの滝」と呼ばれる部分が第2拍内で収まらず第3拍の助詞の前半にかかることから、第3拍では一度下がってから上昇するため、頭高アクセントの語(以下頭高語)の場合のように第3拍の助詞の開始時とほぼ同時に上昇が始まるよりも、余分に時間がかかることが考えられる。さらにF0値の変動幅が話者ごとにほぼ一定しているため、下降のほとんどない平板アクセントの語(以下平板語)は、短時間で上限に達するため、第3拍の助詞の部分の長さが他2者に比べ、さらに短くなったものと考えられる。

#### 2-2-4. ピッチパターンで見えるいわゆる「尻上がり」イントネーションの特徴

はじめに各イントネーションの特徴を概観する。図Ⅱ6-1～3は、先行語のアクセント型別に、終末部が上昇している(右上がりの)もの、つまり疑問の「に?」、驚きの「に!」、確認の「ね」、さらに助詞の「に」に間投助詞の「ね」を付け加えた「にね」の平均的パターンを示してある。確認の「ね」が付いたものは、どのアクセント型についても明らかに上昇が少ないことがわかる。また他の上昇系イントネーションが付くものは、助詞だけでなく、先行語の第2拍も高くなっていることがわかる。非上昇系イントネーション(図Ⅱ7-1～3)では先行語の第2拍についてそれほど大きな上昇はみられない。

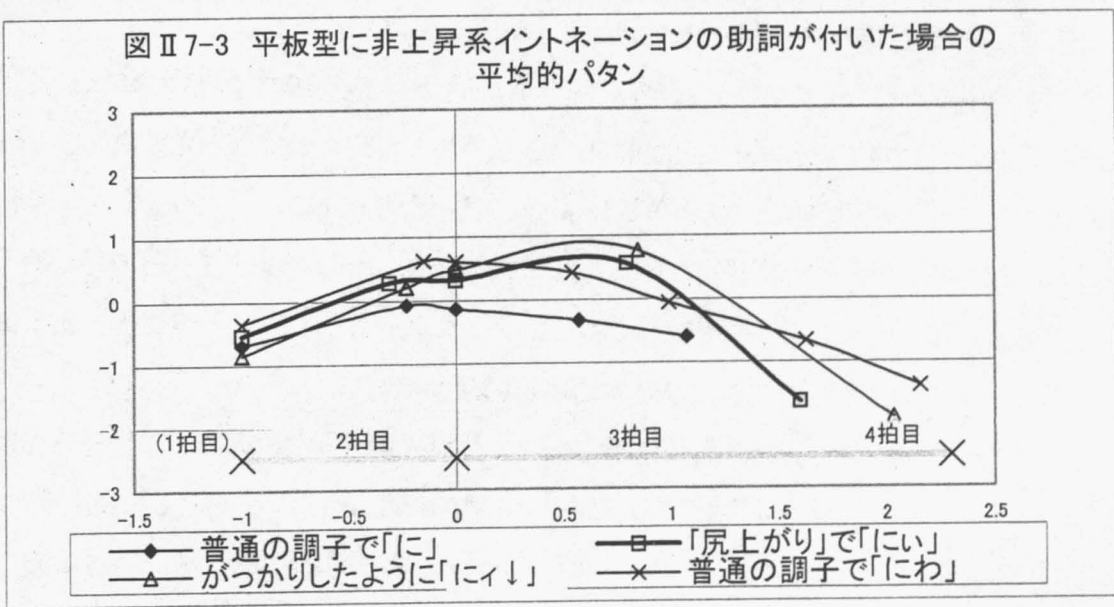
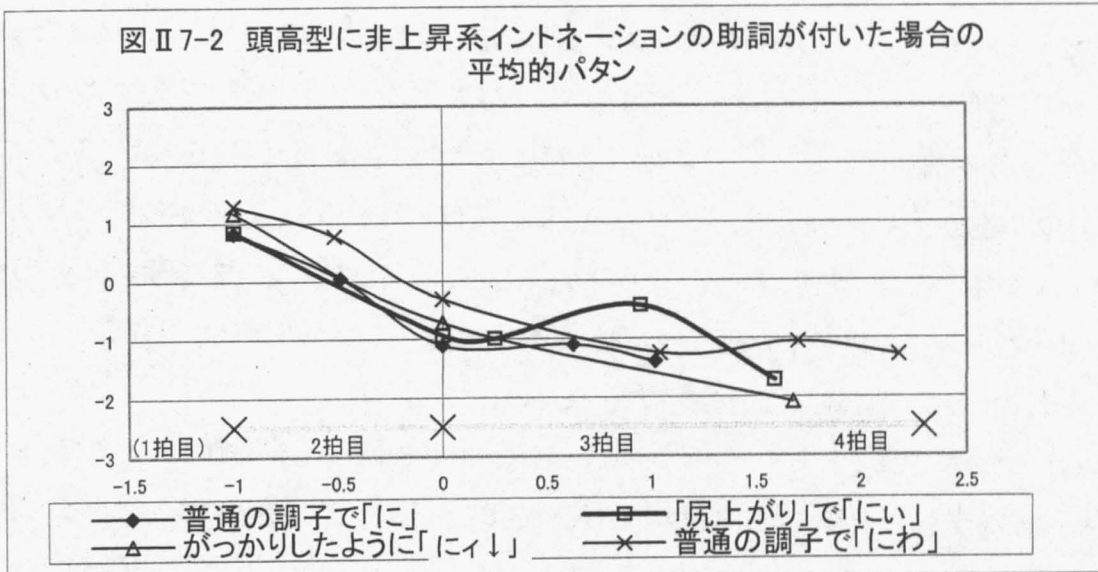
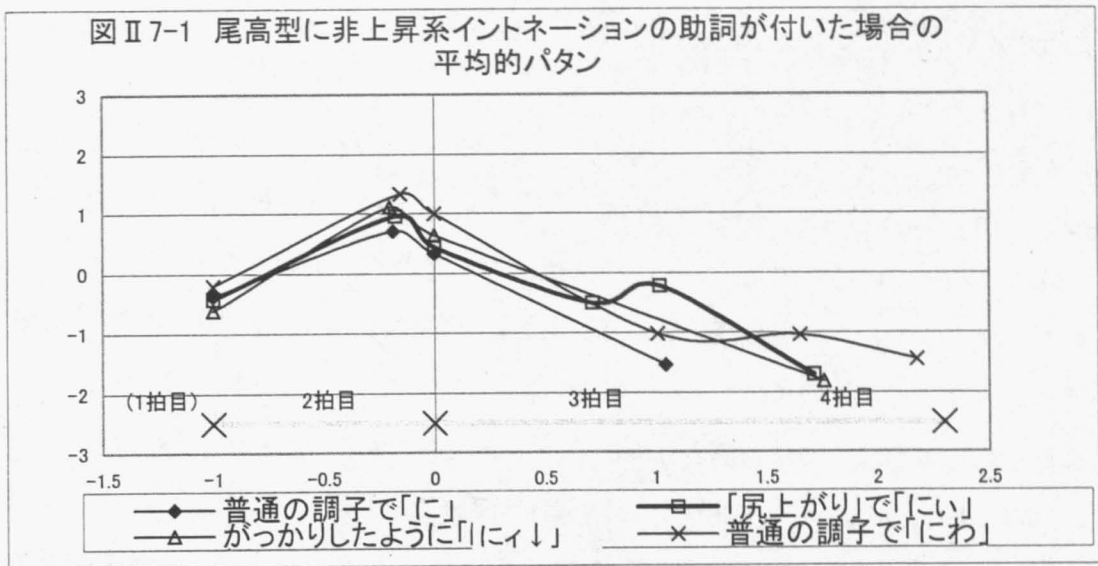




次に図 II 7-1~3 にまとめた非上昇系イントネーションが付くものを、いわゆる「尻上がり」イントネーションを中心に見てみよう。

いわゆる「尻上がり」イントネーションのパターンは、いずれのアクセント型につく場合でも全体で2つの峰があるように見える。頭高、尾高語の場合、アクセント核の部分に高いピークがあり、末尾にまた小さなピークが現れる。平板語の場合も、2つのピークに前者ほどの差はないが、やはり2つのピークが現れている。川上(1993)の指摘する通り、平板語の上昇はあまり大きくない。それでもこの調査に関して言えば、全く上昇しないわけではないことがわかる。







次に先行する語のアクセント型の違いによる、第3拍の「にい」の前半部分の違いについて見ていく。

尾高語の場合はアクセントの影響で、第3拍のはじめに大きな下降があり、それから上昇が始まり再び下降する。頭高語の場合は第2拍の終わりから第3拍の始めにはすでにアクセントによる下降は終わっているため第3拍では下降はほとんどなく、すぐ上昇が始まるか、下降があってもごくわずかである。平板語に付く場合も特に下降はないが、上昇開始時のF0値は頭高語の場合より高い。上昇のイントネーションに関しては、アクセント核の位置によるパタンの違いが見られることはすでに指摘されている(鮎沢他 1991、鮎沢 1992 など)通りだが、そのパタンはいわゆる「尻上がり」イントネーションの前半部分では共通している。

一方、当該イントネーション後半部分のパタンはいずれのアクセント型の場合も共通で、小上昇後は大きく下降し、その特徴的なパタンは他の非上昇系イントネーションとは異なっている。しかし、「尻上がり」の「にい」と、第3章で「下降調」に分類したがっかりしたような「にィ↓」が付く場合を個別に見てみると、特に平板語に後続する場合には、相互によく似たパタンを描くものがあり、文脈の助けなしにどの程度聞き分けられるのか、疑問が残る。

第3章で詳述するが、実際、判別分析という、観測対象がどのグループに属するものか予測するための統計手法を用いて分析した結果、統計的にはいくつかのがっかり調の「にィ↓」は「尻上がり」の「にい」(「昇降調」)に分類され、またいくつかの「尻上がり」の「にい」はがっかり調の「にィ↓」に分類されてしまった。同様の結果は佐々木(2000a)でも得られた。ここでは、普通の調子、疑問や驚きの上昇、確認、いわゆる「尻上がり」、がっかりした調子の5種のイントネーションが、高さや長さといった物理的な数値を説明変数として利用した判別分析によって、どの程度正確に分類されるか検証を行なった。その結果、5種のイントネーション全体では8割以上の判別率を得たものの、いわゆる「尻上がり」とがっかり調の判別率の低く、それでも両者の違いが他のイントネーションに比べ小さいことが明らかになった。次の図Ⅱ8-1～3には先行語アクセント型別に、判別分析においてがっかりの「にィ↓」とみなされてしまう「にい」、互いに紛れなかった典型的な「にい」と「にィ↓」の3つのグループごとの平均的パタンを示してある。「にィ↓」に紛れる尻上がりの「にい」は典型的「にィ↓」のパタンと、ある部分非常に似通っているか、または第3拍が全体的に長い傾向がある。

ただし、これはあくまでも統計上の分類であり、ケース数も少ないので、今後はさらにケース数を増やすとともに、知覚実験による検証が必要であることは言うまでもない。また「にィ↓」のような積極的な下降とそうでないイントネーションの間には境界線が引けるのか、といった点についても、上昇イントネーション内の下位区分とともに今後知覚実験をするなどし

図 II 8-1 尾高型に尻上がり調とがっかり調の助詞が付く場合の  
パターン比較

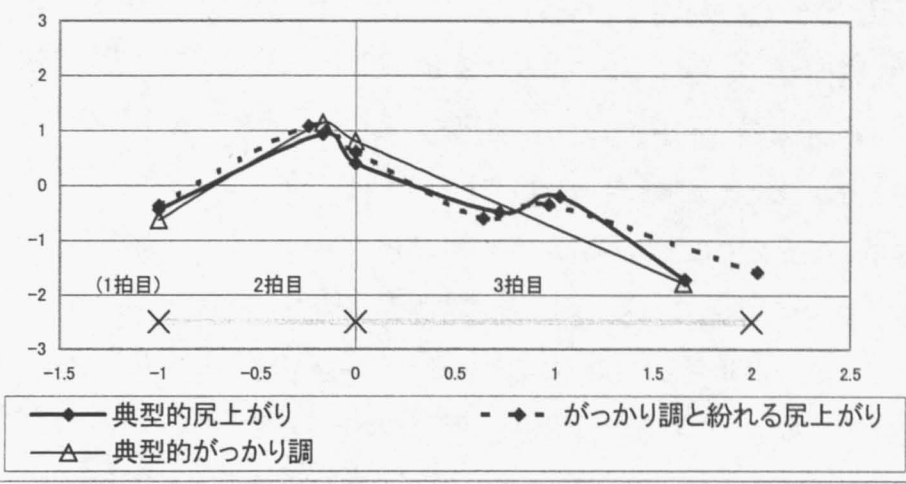


図 II 8-2 頭高型に尻上がり調とがっかり調の助詞が付く場合の  
パターン比較

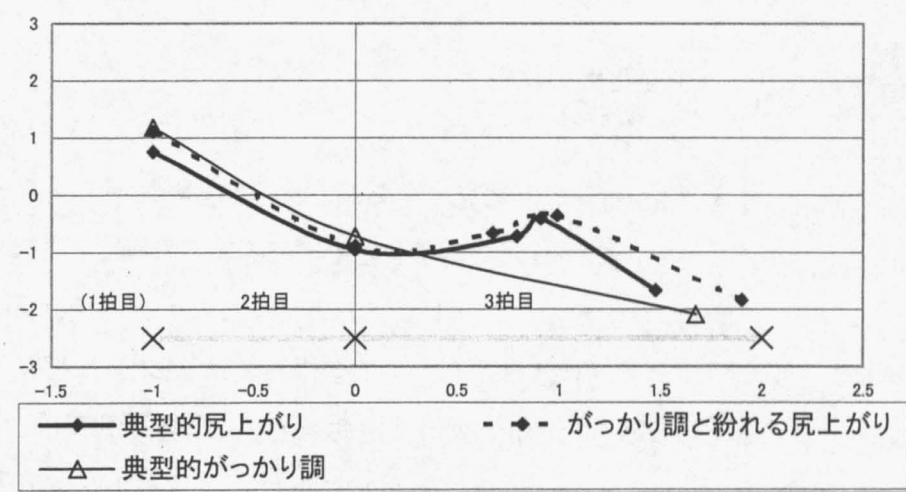
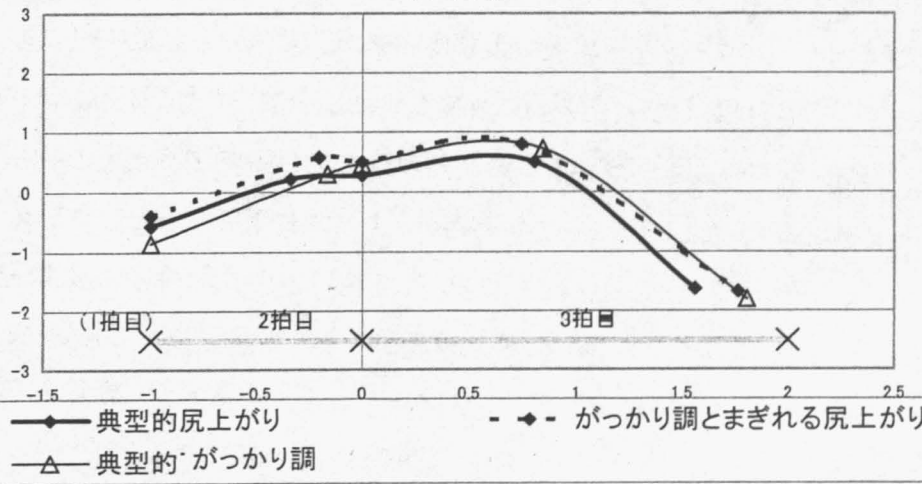


図 II 8-3 平板型に尻上がり調とがっかり調の助詞が付く場合の  
パターン比較



てさらに詳しく調べる必要があるだろう。

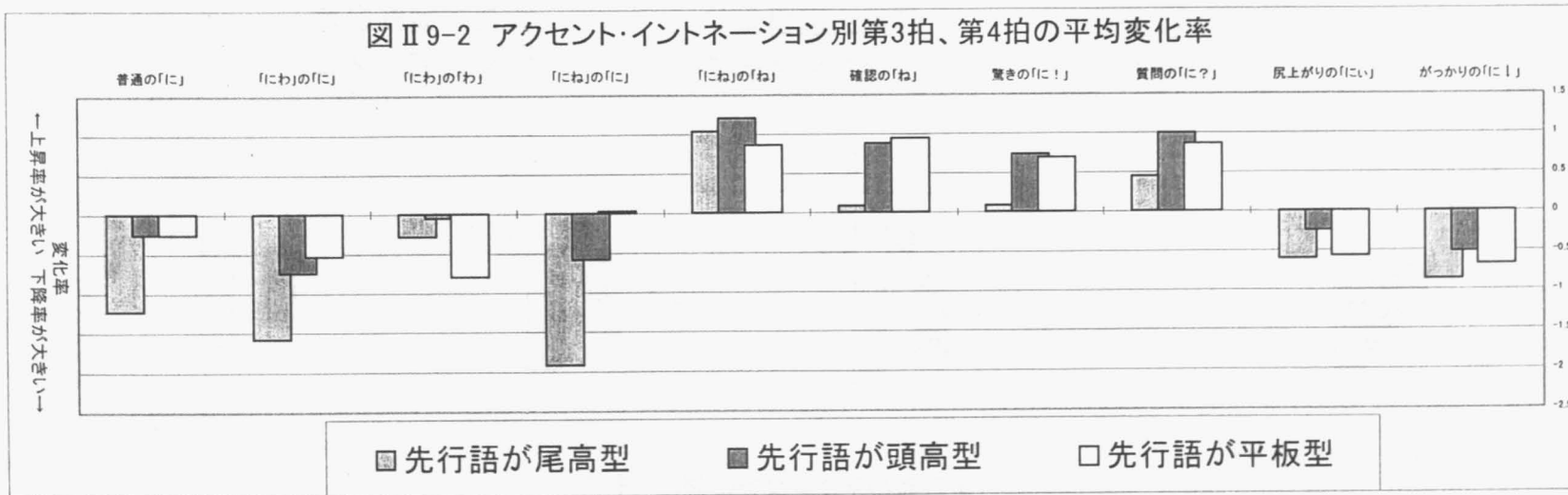
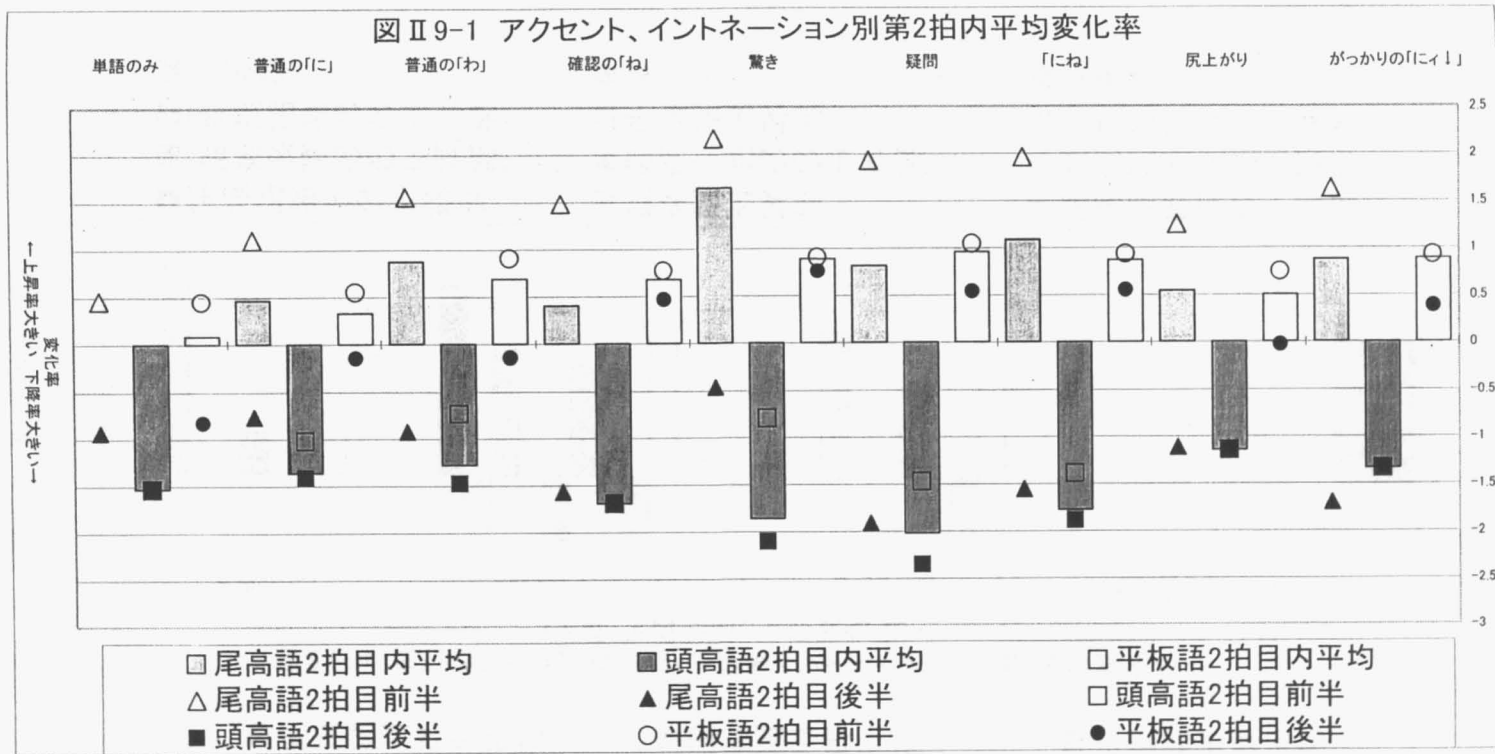
田中(2001)によれば、文末イントネーションは[+上昇]と[-上昇]の2類型であり、「よ」のついた文など、平叙/疑問では捉えられないような場合でも、平叙/疑問で捉えられる場合と同様の2類型を使用し、談話の流れからその一方が選択される、という。つまりこの見解に従えば、文末イントネーションは上昇か非上昇の2類型しかないということになる。第1章で見た先達の日本語イントネーションの類型や本研究第3章でも明らかのように、上昇調には疑問上昇と強調上昇があり、疑問の「本当に来る?↑」と断固とした言明の「絶対に来る>」における「来る」をネイティブスピーカーが聞き分けないとはいえにくい(3-2-3 参照)。したがって、この点から田中(2001)には疑問があると考え、その意味でも上昇、下降イントネーションそれぞれの下位分類に関する知覚実験は、イントネーションの離散性の問題に関する視点からも今後の重要な課題だと言える。この点については第5章でも再び検討する。

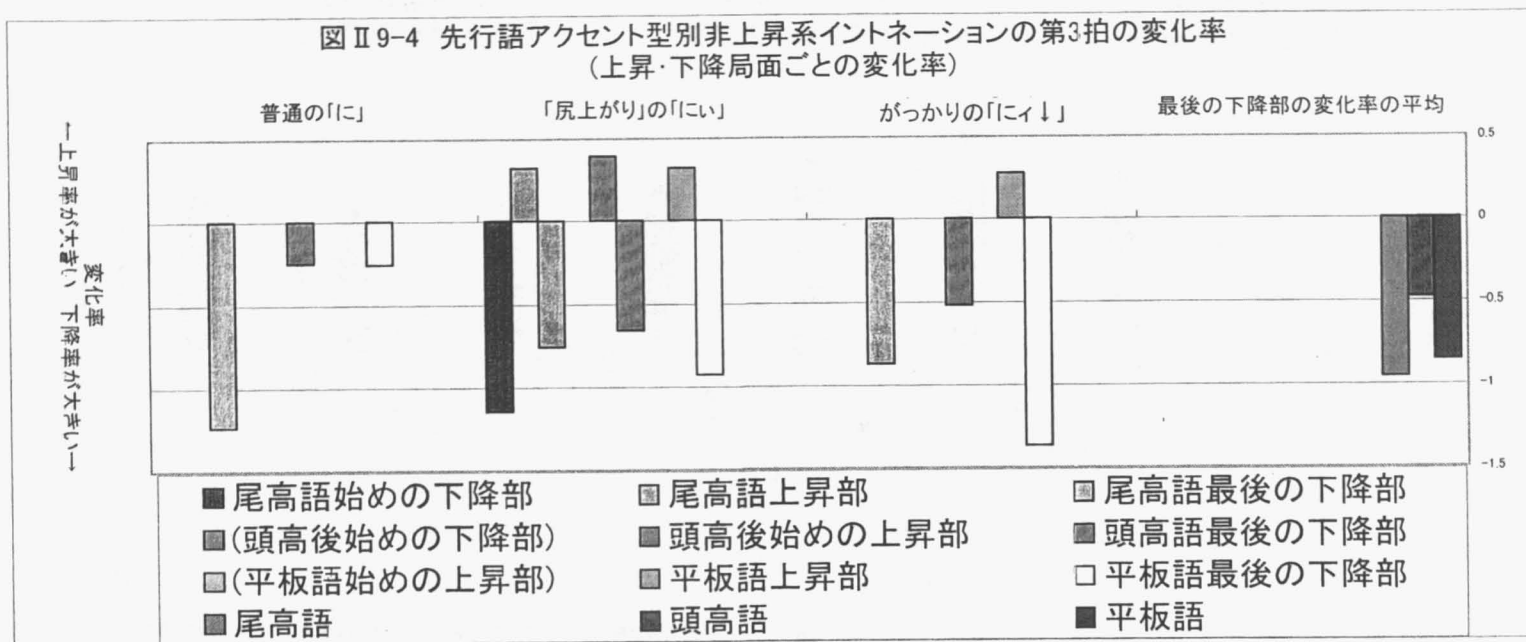
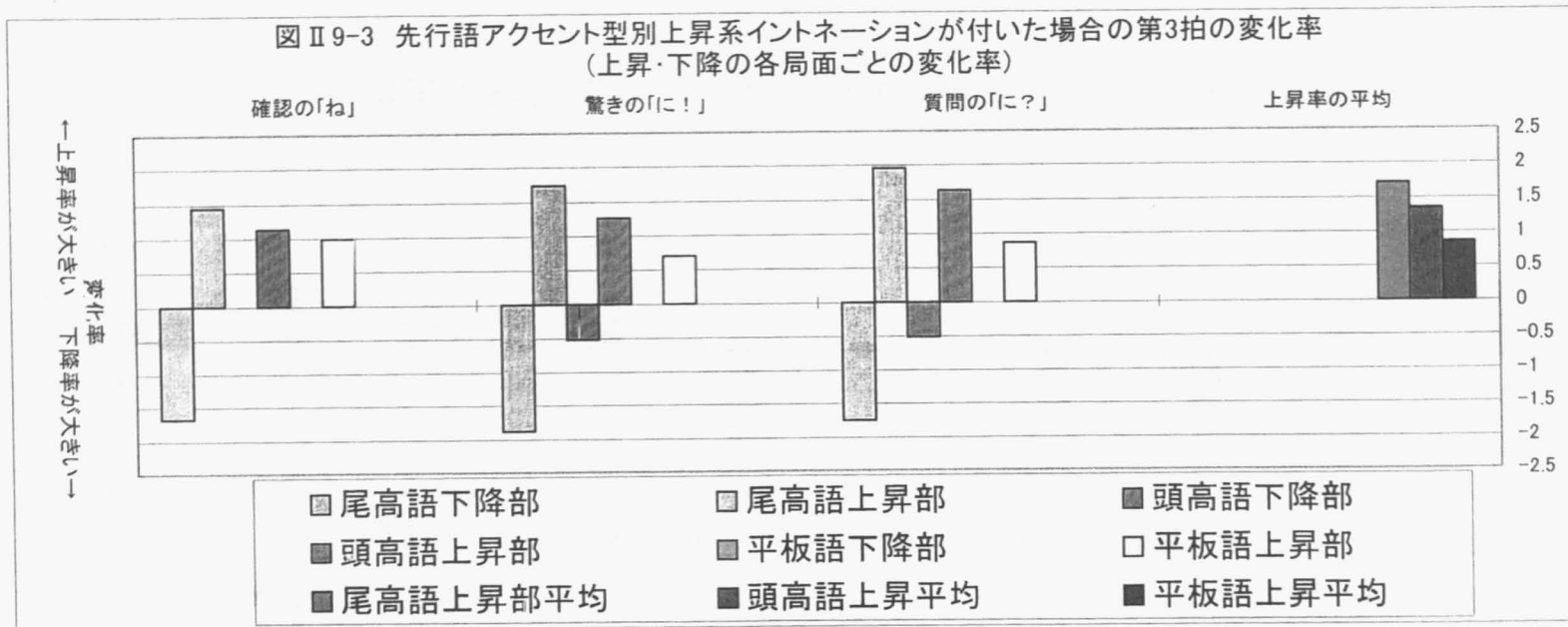
#### 2-2-5. 当該拍内のピッチ変化率の比較

これまでは、各拍の長ささと F0 値を個別に見てきたが、次に図 II 9-1~4 から単位時間あたりの高さの変化の割合、ピッチ変化率について見ることで、前節までの確認をしたい。なお、変化率は、F0 値そのままでは感覚的な尺度とズレがあると考えたため、メル(mel)尺度に変換して持続時間で割ってから、話者ごとに標準化し、各拍全体および各拍内の上昇、下降局面ごとにアクセント、イントネーション別に変化率の平均を取った。なお本研究では、メル(mel)尺度への変換はすべて近似式 ( $\text{mel} = 2410 \log_{10}(1.6 \times 10^3 f[\text{Hz}] + 1)$ 、古井 1992) を利用した。

はじめに全体の傾向についてまとめる。図 II 9-1 には第2拍内部の変化率の移り変わりをイントネーション、アクセント型別に示してある。尾高、平板両語の第2拍のはじめの上昇部分の変化率(△と○)について見ると、平板語より尾高語の上昇率の方が全体的に高い。また上昇系イントネーション(疑問の「に?」、驚き「に!」や間投助詞を加えた「にね」)が続く場合の方がそれぞれ変化(上昇)率が高いことがわかる。頭高語の第2拍は平均すると変化率は正の数にならないが、いくつかの句でははじめに小さな上昇があり、次に下降するというパタンのもも含まれているため、全体で平均すると第2拍内部では前半、後半で下降率に変化が現れた。頭高語の場合も、後ろに上昇系イントネーションが来る場合の方が変化(下降)率が大きい点は尾高語、平板語と共通している。後に上昇系イントネーションが来る場合、概してその前の部分のピッチの変動が大きくなるということが変化率の面からも確認できる。

次に第3拍以降の助詞の部分の変化率についてイントネーション・アクセントごとに分けて





見てみよう。図Ⅱ9-2には第3拍と第4拍全体の変化率、つまり、各拍開始時と終末時の高さの差を当該拍の持続時間(ms)で割った値を話者ごとに標準化した値のアクセント、イントネーション別平均値が示されている。確認の「ね」、疑問、驚きなどの上昇イントネーションが付くときの尾高語の変化率が特に低いのは、拍内の変動(一度下がってから上昇する)が値に反映されていないためである。

図Ⅱ9-3は、上昇系イントネーションが付くものについて第3拍の上昇、下降の各局面別に変化率を示したグラフである。平板語以外では、疑問の「に?」、驚きの「に!」、確認の「ね」の順に上昇率が高くなっている。また、平均して頭高語の上昇率が高く、ついで尾高、平板の順に変化率が高い。これは、先に述べたように上昇開始時のF0値の差によるものと考えられる。いわゆる「尻上がり」にも上昇部分はあるが、その上昇率は概して高くない(図Ⅱ9-4参照)。

図Ⅱ9-4は非上昇系イントネーションについて、上昇下降の各局面の変化率を示したものである。

以上の各図からもわかるように先行語アクセント型ごとの変化率の差は大きい。尾高語に付く「に」や「には」の「に」、平板語に付く「には」の「は([wa])」の下降率が高いのは、アクセント核が直前にあり、そこに「アクセントの滝」があるためだと考えられる。また、平板語にいわゆる「尻上がり」の「にい」や、がっかり調の「にィ↓」が付いたものは、ピッチパタンも互いによく似ていたが、各局面の変化率の推移も非常に似ていることがわかる。これら結果からだけでは両者を分ける明確な境界を見出すのは非常に困難であると言える。

## 2-2-6. 資料の限界

ここでは冒頭に述べたように、いわゆる「尻上がり」イントネーションの音声的な特徴を明らかにすることを目的とした。そのため、ここで使った資料は、実際の談話場面で発話されたものではない。読み上げ音声であり、比較的均質的で整った音声だと言える。これは、いわゆる「尻上がり」イントネーションの音声的特徴をより明確にするために不可欠の作業であり、この作業を通じて以下の点が明らかになった。

当該イントネーションの先行語アクセント型別の実現のしかたは、句末拍の前半においては、これまで鮎沢他(1991)や鮎沢(1992)で明らかにされた上昇系イントネーションのそれと共通している。先行語アクセントが尾高型の場合、第3拍にあたる助詞の部分には第2拍の「アクセントの滝」による下降が引き続き見られ、次いで当該イントネーションの特徴である小上昇と大きな下降が続く。頭高型の場合は第3拍の助詞の部分では、「アクセントの滝」による下降

は前拍で終わってしまっているため下降はほとんど見られず、すぐ小上昇がはじまる。平板型の場合も第3拍開始時から小上昇が始まる。第3拍の後半部分は、先行語アクセント型により、第3拍開始時のF0値に違いがあるため下降率や持続時間に差があるものの、パターンとしてはいずれも大きな下降があり、どのアクセント型に付く場合でも、従来の指摘の通り小上昇後大きな下降線を描き、句全体としては2つの峰がある山型のパターンを描くことが改めて確認できた。これは、他のイントネーションには見られない特徴である。一方、当該イントネーションとがっかりしたような下降調のイントネーションは、特に平板語に付く場合、相互によく似たパターンを示す場合があり、両者の識別がどのようになされるのかについて、さらなる調査が必要であることがわかった。

しかし、実際の談話に現れる当該イントネーションは、よりバリエーションに富んでいる。そして、上記のがっかりした調子以外にも、当該イントネーションと紛れやすいイントネーションの存在も予想される。また当該イントネーション自体も、実際にはそうとは聞こえない(気にならない)ものから、多くの人が嫌うような典型的なものまで様々な音声上の変種があることはすでに指摘されている通りである(井上 1992a, 1993, 1994, 1997, 原 1993b)。

ここで扱った資料では、場面や対話者の違いによって現れる可能性のある発話者個人内のバリエーションや、話者間の差については言及することができない。2-4で述べるが、当該イントネーションを伴う発話と言っても、その認知や受容のされ方、その発話から受ける印象は様々である。実際の談話における当該イントネーションの各変種の音声についても詳しく調べる必要がある。当該イントネーションから受ける印象の違いが、何に起因するのか、そしてそれが当該イントネーションから受ける発話にどのような評価をもたらすのか、という問題については、2-4で明らかにする。その際、再び当該イントネーションの実際の談話における音響上の特徴についても触れることになるだろう。次の2-3では、一旦音声から離れて、当該イントネーションの実際の談話における現れ方を具体的に見るとともに、その談話・文法上の機能、文体(話体)表示機能(以下すべて文体表示機能と略す)を、他のイントネーションや間投助詞の含まれる談話と比較しつつ実例を通して明らかにする。

### 2-3. いわゆる「尻上がり」イントネーションの談話・文法上の機能

ここでは実際の談話に現れた当該イントネーションを伴う発話を具体的に検証して、その談話・文法上の機能を探る。はじめに当該イントネーションの出現箇所、不出現箇所に関する傾向をまとめ、次いで当該イントネーションの談話・文法上の機能、さらには、文体表示機能に